北海道の地名

山口　健児

北海道の山登りで、いつも楽しく、まず胸をはずませるものは、アイヌ語のままつけられている山や沢の名である。

§

オプタテシケ（槍のそれる山）、イドンナップ（蟻の塔―北海道蝦夷語地名解）などの山名を聞いただけで、どんな地形がでてくるか、どんな眺めが楽しめるかの期待でウズウズしてくるのは、私一人だけではないだろう。

アイヌ語にうまく漢字をあてはめて、幌尻岳（ポロシリ、大きい山）や風不死岳（フップシ、トドマツの多い意―アイヌ民族誌）のように、漢字でありながらもアイヌの発音をうまくうつしたものもあるが、なんともあてはまる漢字がみつからず、片仮名で地図に書きこまれた山には一層の魅力が感じられる。

そのために、ヌタクカムウシュペというりっぱな名がありながら大雪山と呼ばれたり、マツカリ、ヌプリという厳とした名があってもシリベシ山と呼ばれたことから、日本書紀、斉明天皇五年の条の後方羊蹄（シ

リベシ）の字があてられ、原名とは似ても似つかぬ羊蹄山（ヨウテイザン）となったことは、あまり喜ぶべきことではないような気がする。

同じように北海道各地の地名でも、漢字で書かれていても、ほぼアイヌ語の発音を追っているから、北海道の伝統と風格を感じさせているのである。

札幌（サト・ポロ、乾く大きいの意）、小樽（オタ・オル、砂浜の中の意—北海道の駅名の起源）、（室蘭モ・ル・エ・ラン、小さい坂の意）などは、見ても聞いても大変気持がよいが、旭川となると古名のチュ、ベツ（東の川の意）から東なら旭の出る方向だからとのことからの命名とは、考えすぎの感がする。

いまの北見市は昔の野付牛（ノッケウシ）のことだとようやく覚えこんだころ、北海道三笠市と書いた手紙を受けとり、さてどこのことかとあわててしまった。

人間の集団生活には便宜主義が横行するものであるが、思いつきで変えてしまうことは北海道の地名に関しては慎重であってほしいものと思う。

明治のはじめは英吉利（イギリス）、仏蘭西（フランス）、倫敦（ロンドン）、伯林（ベルリン）などのあて字を考えた時代だったから、アイヌ地名の漢字化もさほどのこと

でなかったかも知れないが、敬服するものも多い。

中でも贅嘆措く能わざるものに音威子府（オトイネップ）、弟子屈（テシカガ）、留辺蘂（ルベシベ）があり、北一已（キタイッチャン）、嫌侶（キロロ）、嶮幕帰（ケンボッケ）にいたっては、学の遠くおよぶところではない。

§

アイヌ地名は、アイヌ人の生活を中心とした自然の状態のままが命名されているので、アイヌ文化の探求の宝庫ともいえる。文字をもたず発音だけのアイヌ語は、ユーカラなどの歌謡が地名にしか残っていない。

最近になって全国各地方では、盛んに地名の変更が行なわれている。それぞれりっぱな理由があってのことと思うが、私のいる東京の町の中でも、旧い地名はほとんど残っていない。そのためにいまでは、自分の生まれたところが解からなくなったと嘆く友人も多くなってきた。

§

時代の波は、それらしき理由をもって北海道のアイヌ語地名を押し流してゆくかも知れないから、これも自然保護の運動の中に入れておく必要がありそうである。

（日本農産工業株式会社）